

実 在 の 分 節 化

森 下 盈

(帯広畜産大学英語学研究室)

1976年8月30日受理

The Segmentation of Reality

By

Mitsuru MORISHITA

序

人間が時間、空間的に感覚対象にたいし、個々の、特有の知覚内容を経験することが、彼が実在を分節的には握する土台となっている。そのような分節的は握を言語学的に分節化(segmentation)とする。分節化は言語体系が創られるためには不可避的前提であった。分節化の作業によって得られたそれぞれの segment が文法性をもって言語化され、言語表現上の意味単位となり、実際の発話の構成部分となることによって、言語体系はかたき作られてきたのである。

分節化はその本質において恣意的(arbitrary)である。観念的にぼろ漠とまとまっている宇宙は一つの segment として抽出された。これほどの分節化の恣意性は、言語発生との関係で、原初に遡り、実在の分節化を明らかにする出発点としては当を得ていないかも知れない。しかし宇宙が一つの segment であるということは、言語起源時における人間の宇宙にたいする意識とは関りなく、「宇宙」という語が存してきた限りにおいて、それは通時的(diachronic)観点からも、共時的(synchronic)観点からも妥当であり、そのことによって、実在の分節化が、一方において、最大の方向に恣意的であることが示される。他方、それが最小の方向に恣意的であることは、物質的側面においても、観念的側面においても、各種の学問的分野で確かめられることである。この最小、最大の方向への実在の分節化の恣意性よりも、一層、言語にとって重要で、本質的なことは、各個の物質、現象、様相、性質にたいする記号付与という分節化の作業と、それら各々の独立物としての連続体(continuum)の分節点の位置設定に見られるその作業である。このことは、たとえば、異なった言語間では、語い面で連続体の分節点に位置の差異が見られることや、ある言語ではいくつかの分節をもつ連続体が、別の言語ではそれ以下に、あるいはそれ以上に分節されていたり、または全く分節されていない事実がある。

特定言語内では、同義性 (synonymy) における segment の伸長範囲の重複、二語以上の使用による連続体の分節点位置の移動、隠喩 (metaphor) による分節区域の性質の変容、新造語 (coinage) による分節区域の拡張、縮小などの問題がある。

文においては、同一の意味を表わすのに、伸長範囲のより大きい分節を用いるか、より小さい分節を用いるかによって文の長さが違ったり、語によって分節点を明示できないところを文によって補充、説明するなどの問題がある。実際の発話においては話者、聴者が分節を正しくは握っていないために発話を不完全に構成し、解釈することにより、あるいは、話者が自分のものとして有している分節を聴者がそれを未だ経験し、記憶していないことにより、伝達に障害の起こることがある。

実在の分節化は言語事実とのかかわりでそのようないくつかの問題を提起する一方、この「分節化」ということばが、上述のことにより、実在ばかりでなく、知覚作用、言語表現の意味と密接な結びつきをもって用いられていることが理解される。本稿は、¹実在の分節化とはどのようなものであるかを考察の主軸として、言語学的観点における実在の性質、心的機能、意味、言語事実、文法の諸事項との関連において、言語における分節化の位置を明らかにしようとするものである。

1

分節化されるものは具体的対象と抽象的对象に大きく分けることができ、前者は material で、後者は nonmaterial である。言語学的に両者は reality として一括することができる。Dwight Bolinger はこの二種の実在を 'outside world' ということばを用いて次のように述べている。"The expression *outside world* does not mean what is 'outside us' but what is 'outside blanguage'. It may well be inside us. If I say I have a headache, or that I saw you with a red hat in my dream last night, I am relating something that no one else can observe, yet I put it into words as readily as I refer to the weather or to the days major league baseball scores. This is the sense in which we must take the term *reality*, for it includes what is viewable only from within as well as what can be seen by anyone."¹⁾ 「言語の外にあるもの」は人間の心理を媒介として分節され、心的なものとのかかわりにおいて言語のなかに位置を占める。nonmaterial なものは material な構成物の様相、関係、実体として後者に根拠をもっており、人間の知覚・認識作用との関係では物質的に存在すると同様の意味をもちながら存在していると言える。このことが、両者が同等の資格をもって分節化の対象となるゆえんである。

しかし、material reality は明りょうに覚知可能なものとして客観的に存在しているが、nonmaterial reality は必ずしもそうでない。後者は前者のそのような性質を手がかりとして分節化がなされ、その意味で、後者は前者にたいし secondary であることになる。しかし、

“secondary”は“less important”ということではなく、具象物の名称が抽象物の名称よりも重要であったり、感覚に具体的に映ずる様相の記号が抽象的には握される様相の記号よりも意味があるということはない。大別された二種の reality の分節は言語体系のなかの必然的産物としてそれ自身の意味と機能を有している。

分節化の問題をよりとらえやすく語るためには、material reality にまず目を向けるのがよい。それは分節化のより明りょうな説明を提供してくれる。material reality のほうが non-material なものよりも第一義的であるため、また、前者が人間の感覚器官をより直接的に刺激するために、広く動物的観点をもって分節化を考えることができるからである。この種の実在にたいする感覚作用は視覚が最も代表的で、その segment はほとんど視覚映像の結果物である。material reality としての具体物はわれわれの心的機能から独立して空間に存し、われわれが外在世界の一員となって、それを感覚的に受容しない限り、われわれには無関係であり、意味を持たないといってさしつかえない。個々の全ての具体物に名称を必ず付与しなければならない理由はどこにもなく、われわれにとって関係、意味がなければ名称付与は本来行う必要はない。また、われわれが具体物にたいしてもっている関係、意味の程度によって分節化の方式が異なる場合もある。このことは必ずとは言えない。というのは具体物の独立的性質がまず非常に強く感覚を刺激し、具体物間にあの物とこの物は別であるという意識が primitive な感覚で生ずるからである²⁾。それは動物的な感覚と言って構わない。この物とあの物は別であるという意識が分節化の作業をする一般的な力であるが、そのような単純な弁別能力だけでは動物的な感覚範囲さえ越えていない。言語的には個物間に共通性を感じず別々の感覚が必要である。このことから、segment の意味は general であることになる。

感覚器官が初めて一つの具体物を受容したとする。すると、その物体は心象として全体的なかたちでその感覚器官をもつ個人の心理に潜在する可能性がある。その可能性が、物体の特殊性ゆえであれ、感覚する側の心理の偶然ゆえであれ、実現したとしよう。その潜在化したものは、もしその個人が再度同じ物体、またはそれを連想させる物体に出会わなかったり、あるいは何らかの観念が想起させてくれなければ、彼のなかに呼び覚まされることもなく、潜在を解かれるということが起こりうる。そして、最初に彼がその物体に出会ったとき、それにある名称を付与していたとすれば、彼にはずっとそれが役に立たなかったことになる。segment を認識し、言語化する過程の出発点はこのような状況のなかに示されるが、その意味の共通性の問題はもっと状況を変え、進めて行かねばならない。彼がある物体に時点的に感覚を働かされたという点では、彼には文字通り時点的に関係があり、意味があった。それが、たとえ再度同じ物体に出会さなくとも、つまり空間的制約を受けなくとも、ただ意識のはたらきに限って、mental image として喚起されることはあるから、それが何度か彼に喚起されるなら、形式上辞書項目として固定的 (fixative) な、使用面では反復的 (recursive) な言語形式とのかか

わりが濃厚になる。もし彼がその物体に出会った際にそれにある名称を与えていたとすれば、彼は S. Ullmann の “meaning is a reciprocal relation between name and sense, which enables them to call up one another³⁾” ということばに見られる名称と意義の連想関係を内的に所有し、名称のかたがで抽出された segment を、特に言語音発声に障害のない限り、その意義なる心的内容と共に言語形式として発しうるであろう。しかし、この見方はまだ segment の意味の共通性を語るにまで届いていない。だが、そのことに結びつく糸口は、ある一つの物にたいしてではあるが、その mental image ができ上がって、言語形式も定まったことの中に見ることができる。物の mental image が個人に在ってこそ、たとえば再度異なったところに同じ物を目にしたときは、すでになされた名称付与は生きてくるのである。

名称付与は、ある特定の場所に存在する一つの物を一度限り見ることによって行われうるが、その場合は segment が定まったというだけで、そのほとんど全般にみられる性質的に不可分離の意味の共通性は potentiality としての域にとどまっている。しかし、名称付与は、意味の共通性という便宜さを人間が意識的に目的として行ったものではなく、結果としてそのような便宜さが表面化したと考えるのが妥当であろう。少なくとも原初的段階ではそう見なしても危険ではないと思われる。Sapir の次のことばはこの共通性と便宜性を示しているものである。“...the speech element ‘house’ is the symbol, first and foremost, not of a single perception, nor even of the notion of a particular object, but of a ‘concept’, in other words, of a convenient capsule of thought that embraces thousands of distinct experiences and that is ready to take in thousands more.”⁴⁾

material reality が唯一物として存在している場合には、それを表象する名称との関係では意味の共通性が問題とならない。表象機能を有する限りは、その存在を segment としてとらえはするが、他のそれと同じ segment が無いため、それが持つ固有性を他の事物と結びつけ、そのなかに分節範囲の共通性を認めることを言語的には絶たれているのである。もちろん、知覚という点に限れば他の事物との類似、相違、関連が考慮される。segment の意味の共通性は material reality においては二者以上の事物間の概念的共通性の問題であり、それは物質面の共通性を基礎として、それを認識的にとらえて、分節範囲の共通な segment が選び出される。しかし、その設定における物質的共通性とはそれを構成する要素が質的、量的に異なった物体の間で同一ということではなく、認識能力——それが単純であれ、複雑であれ——によっては握されるということが結果として起こるのであるから、知覚上同じものということの意味している。たとえば、‘house’ を分節として選び出すとき、物質的共通性を知覚対象とみなし、物質分析の対象として、その共通性を精細に求めているということではなく、‘人が住む建物’ということを概念的にとらえる。その概念が ‘house’ という分節にみられ、いくつもの houses にそれが共通に認められることになる。

material reality が言語形式化されるために、知覚上の同一性という物体間の概念的共通性のほかに要求されることは物がわれわれとの関係でもっているその機能である。知覚上の同一性は機能を抜きにした外形、表面にたいする単純なとらえ方で終わることがあるからである。物の機能を考慮することは、その外形、表面の知覚にとどまらず、われわれと言語との関わりで material reality を考えていることを意味する。たとえば、'watch' には、形が円いもの、四角のもの、六角のもの様々で、針も形、長さが違っていたり、色も様々である。それでも、その物にたいして 'watch' という名が付けられるのはその持つ機能の共通性のためである。'house' についても、形がいわゆる 'house' と同じであっても人が住むことができるという機能をもっていなければ、現実生活では 'house' と呼ばれない。逆に、形が妙に違っており、色も極端に変わっていても、'house' 本来の機能をもっていれば、その名称で呼ばれる。

このように、material reality が言語的に分節として選択されるためには、そのもつ形態と機能が基礎的の要件となっている。形態の認識については、視覚によってほとんどの material reality が容易にとらえられるが、機能はそのような単純知覚の領域でなく、反省知覚の領域である。単純知覚は独立して在るものをただそのようなものとしてとらえるはたらくで、形態、色、大きさの相違もそれによってとらえられる。それらは primitive な弁別的知覚の対象で動物的観点をもっても考慮することができる。一方、反省知覚は言語形式を作り出すためのより上位のレベルにあり、特に material reality を言語的に厳密に分節化する役を担っている。機能の認識は個物ごとに限ってそれが行なわれるだけでは言語的と言えない。ここで、先述した共通性を知覚する力が必要になる。この能力が単純知覚——独立して在るものをそのようなものとしては握する——と反省知覚——機能を独立的には握するという、この両者にはたらくことによって意味の generality をもった言語形式が生まれる。たとえば、'mountain' は単純知覚によってその形が認められたのみでは絵に描かれた 'mountain' と知覚映像的に同じである。しかし、描かれた 'mountain' に反省知覚がはたらけば、それが natural なものと区別される。それは、'mountain' の機能を悟るからである。

material reality は自然に在るものと、人為的に在るものとに、また動的なものと静的なものに分かれる。人為的に在るものはそのほとんどすべてが人間が目的をもって作ったものであるから、それに機能があるというのは理解しやすく、動的なものは '動き' を有すので、それに機能があるというのも分かりやすい。しかしながら、自然に在るものも、静的に在るものにも機能は存しており、そのことは material reality が外形、外状ばかりでなく、内的な質と共にわれわれと関係していることから来ている。内的な質が機能を生み出しているのである。その質は外形、外状と共に一つにまとまっており、そのまとまった全体がわれわれに機能的に関係してくる。この関係はわれわれにとっての目的だけでなく、われわれにたいして、どのような様式であれ、感化的影響を与えるという意味あいを含む。この見方からして、自然に在るも

のも、静的に在るものも機能をもつと言えるのである。

分節化において物の機能とはそれがもっている本来の機能のことである。‘watch’は、本来、時を示すものでそれが壊われていてその機能を果さなくとも‘watch’と呼ばれうる。また、たとえば、‘tree’は植物として生きている木質を具えたものとして在るが、枯れたものにも、‘tree’と言える。だが、この場合、厳密に述べるときは、それらを a broken watch’ ‘a dead tree’ とするように、別の分節として扱われることに注意すべきである。しかし、別の次元で ‘a broken watch’ の機能、 ‘a ‘dead tree’ の機能があるから、それらが言語的に lexical item として単一に扱われる可能性があることは言うまでもない。そのことも、つまり、分節化においてその対象の本来の機能を問題にしていることを示すのである。

物の機能は、自然物であれば自然的様式をもって存し、人工物であれば目的を具えて存しているが、その機能は人間が握るものであるから、どのようにそれをとらえているかは言語によって異なってくることがある。それは、一つに言語使用共同体の物の機能の重要さの度合にかかっている。material reality としては物に機能の差が見られるわけであるが、ある言語ではそれを一つの segment として扱い、他の言語では機能の差に従ってさらに分節している事例がある。たとえば、エスキモー語では、「降る雪」「積もったやわらか雪」「吹き寄せられた雪」に別々の名称があり、日本語の「雪」にあたることばが無い。氷についても、「淡水の氷」「海水の氷」「氷山の氷」に別々の名称があり、日本語の「氷」にあたることばがない³⁾。また、日本語では兄弟関係、姉妹関係について、「兄」「弟」「姉」「妹」と言うことが普通であるが、英語では特に必要が無ければ ‘brother’, ‘sister’ で済ませる。エスキモーでは「雪」「氷」が日常生活で日本よりも重要な意味をもっており、英米では兄弟姉妹の上下関係が日本よりも通常意味をもたないということである。これは一般的な言い方であるが、そのような事例が見られる言語ではそれが特殊性としてあることは疑いない。一般的にしか言えないのは、日常生活で、たとえば、日本においても「積もったやわらかい雪」よりも特に「降る雪」の方が重要な意味をもつ場合があるし、「降り寄せられた雪」だけが特に強い意味を持つことがあり、またとりたてて上下関係を意識しなくても「兄」「弟」「姉」「妹」をいうからである。

2

material reality の分節化では、それが存在すること、その形態、その機能、それらにはたらかける人間の心的作用が要因となっている。存在物は必然的に形態と機能を具えているが、心的作用との関係ではそれが必ずしも分節化の対象となることが決まっているわけではなく、分節化されるとしても、どのようになされるかは物と心的作用との相互関係に依存するから物質的観点でのみ分節化を考えることはできない。その相互関係が物質の客観的性質をそのまま生かすこともあるが、全くそれを度外視して心的作用の恣意性が前面に出てくることもあ

る。そして、根本的には material reality を基にしながらも、非常に抽象性の強い純概念的な segment が生じ、分節範囲の境界が極めてあいまいな語ができ上がることがある。そのような語はしばしば定義が困難であり、material reality, それの性質, または物と物との関係に根拠を置くのではなく、観念そのものが対象となっていると言ってよい。分節化の恣意性は分節を最大、最小の方向に選び出すことに見られると共に、そのような事実のなかにも見られる。しかも、material reality の分節は本質的に無限に選び出せると同様に、観念そのものの分節も無限に選び出せる。そのような恣意性に制限を与えているのが、分節を選び出すことにおける必要性と心的機能の有限性である。だが、この必要性には有限的な線を設けることができなく、また、心的機能の有限性も単にそれを人間としての有限存在の精神性の枠を理論的に認めざるを得ないという意味での有限性に他ならない。material reality は言語との関りでは人間が関与するものという点で有限であるが、それは単に存在物の数が問題なのではなく、その性質、様相、実体、物と物との関係も問題となり、そのなかにほとんど無限の分節が含まれていると言えるし、分節を選び出す必要性は、先に述べたように、有限の線を設定することができなく、また心的機能は有限状態のなかにあっても、その機能の仕方においてはほとんど無限と言えるから、言語的にも分節の数は理論上無限に選び出すことが可能である。実際には、分節は有限個として選び出され、語の数は有限である。語にあっては、それが言語単位であり、一般的意味をもつことを前提としているから、元来有限であることが必要とも言える。言い換えれば、それが有限の個数であれば便利に用いられうるということである。有限状態を作っているそれぞれの構成素はそれぞれの generality の幅をもちながら、つまり material reality の分節化との関連では、どれだけの数の抽象化される以前の分節の構成部分を含むかによって generality の幅を規制されながら、語として便利に機能するわけである。

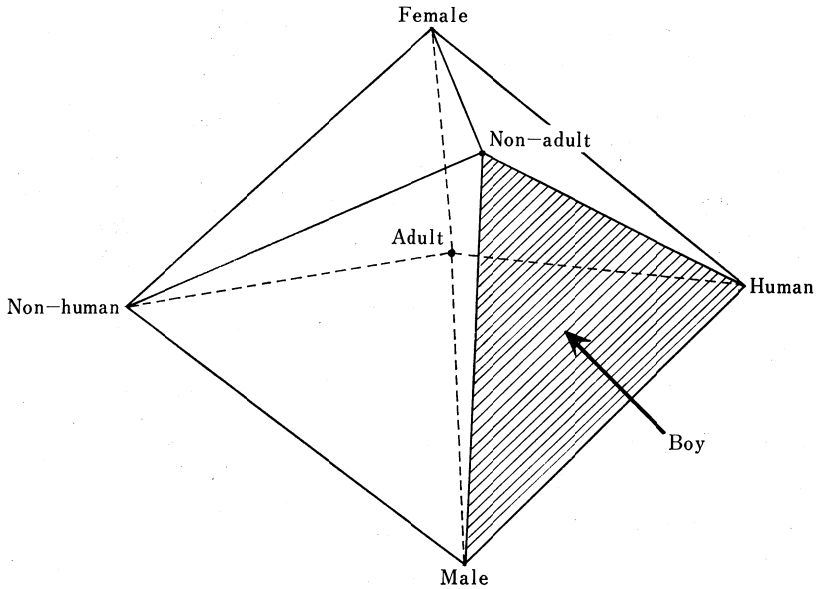
material reality の分節的把握における有限状態を構成するのが、具体的に存する物とその部分、偶有性を抽象化した分節である。分節はこのように abstraction である。それがそのまま語となることもあるが、ほとんどは語のある一つの領域を形成するかたちで、語の内部で他の領域を形成する分節と共存している。一つの語の内部の分節の各領域は互に無関係に一線が画かれて独立して在るというのではなく、その領域が一部重複しながら存在しており、重複している部分は語を構成する領域全体のつなぎとなっている。このような重複はもちろん分節化の対象の数ではなく、質に起因する。質の類似性が内包されたまま対象の分節化が行われているゆえに領域の重複が生ずるのである。このような領域の部分的重複は二語以上の間でもみられる。これが類義性 (synonymy) として扱われる言語事象である。一語内における二つ以上の分節の存在は多義性 (polysemy), ある語の分節の全体領域, あるいはその部分と別の語のそれらの対立は反義性 (antonymy), 異なる分節が同じ音形式で表わされるものは同音異義性 (homonymy) としてそれぞれ扱われる。

このように見てくると、分節は意味自体でなく、意味を直接的に担う素材であることがわかる。それゆえ、類義性、反義性においてそれが同じか否かが問題とされうるのである。分節は抽象化され概念的には握られ、それが言語形式として語となって現れる。抽象的な概念的な握とは心的内容のことであり、語の意味はそのかたちで喚起される。それゆえ、分節の意味とは語の意味である。しかし、ほとんどの場合、語はいくつかの分節から成っているから、その際に語の意味は分節の意味であるというのと、一語が一つの分節から成っている際に、そう言うのとでは事情が異なる。正確には、前者では、語の意味はその語に含まれるいくつかの分節の一つと同じであるということになる。

分節化は全面的に対象の物質的区画に依存していないけれども、主として知覚される demarcation line の助けを得て分節の領域を設定している。demarcation line によって分けられている各部分はある部分にたいしてそれを区別するための領域的關係を有している。その line によって区別される領域はそれぞれ記号を付与することができるが、ただ他の領域とは別であることを示すためにある領域が選ばれ、記号付与がそれにたいしてのみ行われることがある。しかし、この場合でも、他の領域は知覚内容としては存在しており、その限りにおいては記号付与の行われた領域と同じ資格をもっている。そればかりでなく記号付与を可能にする distinction の役をもつのであるから、言語形式化される分節にとっては不可欠だったのである。このように、分節を選び出すための distinction の力となる領域は色々な関係様式をもって、その分節に接触している。形、質、量、数、距離などがその分節に接触し、また接触度の強弱も様々である。そのような他の領域の様々な接触は、ある分節が設定されるにおいてその位置を定めるのである。定められた位置はさらに他の領域的關係を生じ、他の分節との位置関係を明りょうにしたり、複雑にしたりし、また新たな固定されるべき位置を生み出して、新たな分節を選び出す力となる。領域的關係は、ある特定の分節が設定されるためにより強くそれにたいして領域的關係しているものが、より直接的な助力となるが、一方、そのような領域における肯定的な距離的つながりばかりでなく、すでに覚知されていて、設定されるべき分節とは対立をなす領域をもつ分節も役立つし、単に設定されるべき分節と連想上の要因をもつ分節も役立つ。

ところで、Dwight Bolinger は 'Boy' という語の関係領域を次のように示し、その分節の領域を明らかにしている⁶⁾。

これはもちろん 'Boy' という語に含まれるいくつかの分節のなかの一つを取り出したものである。'Boy' は 'Human', 'Male', 'Non-adult' という頂点を結ぶ三角形によってその領域が図示されている。この三つの語は 'Boy' の aspect を表わしており、それぞれ肯定距離的な定義項目となっている。それらによって定義すれば、'Boy' とは 'Human' であり、'Male' であり、'Non-adult' であるということになる。'girl' は、その図に従って、'Human', 'Female',



‘Non-adult’ という頂点を結ぶ三角形によってその領域が示される。ここで、‘Human’, ‘Male’, ‘Non-adult, etc. は aspect を表わす一方、分節の demarcation line を形作るものである。それらの語は位置が点として示され、実はそれ自体領域をもっている。それらによって表わされるそれぞれの aspect は図に従えば三角形の内部を構成しているのである。しかし、それらは様相的に構成に与っているということであって、三角形の内部は ‘Boy’ の分節の領域である。決して、‘Human’, ‘Male’, ‘Non-adult’ が総計されたからといって、‘Boy’ そのものになるわけではない。これは、それらの語の意味が不完全にしか加えられることができないというのではなく、様相語の分節との分節 material reality の相違から来ている。同じ level の分節を合わせて他の分節を形成することは可能であるが、違う level の分節を合わせても一つの領域はでき上がらない。ある物の領域全体を二分し、それと equivalent な物についても同じ demarcation line を設け、二分されたものをそれぞれ分節として抽出し、それらに二つの単語を設定し、二分されたものを全体として形作るために二つの抽出された分節を合わせるならば、理論的にもその物の分節ができて上がるだろう。

様相語によって、ある分節の様相が表わされるとしても、その分節の領域と一体化するものとしてそれによる表象が行われるのではなく、demarcation line によって囲まれる領域を cover しているのである。‘Boy’ は ‘Human’, ‘Male’, ‘Non-adult’ によってその分節の領域を異なった level の分節の付加によって cover されているということである。その cover には層がある。最上部の層は ‘Real’ という語によって表わされる様相の層で、それは ‘Unreal’ の

層と対立している。次に 'Dead' と対立し、そして、'Animate' の層が来、その下に 'Non-human' と対立する 'Human' の層が続いて、次に 'Female' に対立する 'Male' の層が来るのである。'Male' の層の下には 'Adult' と対す 'Non-adult' が位置して最終的に様相 cover の層ができ上がって、'Non-adult' の分節の領域を広がりとして同等に cover しているそれぞれの語が様相的に 'Boy' の分節を cover するのである。これらの様相語はそれらの表わす分節の領域の大きさの点で上部にあるものが下部にあるものよりも大きな広がりをもっており、'Boy' よりも上部にあるものはそれぞれ別の実在の分節と様相的に領域関係を有している。

このようにして、'Boy' の第一義的な分節の範囲は定められるが、それを定めている 'Human', 'Male', 'Non-adult' はそれぞれ 'Boy' を用いるときの選択制限規則の項目でもある。言語表現上、この項目を 'Boy' を用いるにあたって守らないことはありうる。この場合に、多くの metaphor が見られる。'Boy' の本来の分節領域が別の分節としかもとも領域関係をもたない様相語とつながりをもって、その別の分節の領域を部分的に含み、異なった分節範囲を作ることによって metaphor が生じるのである。たとえば、四十歳の男が 'I'm still a boy.' と言ったときには、'Human', と 'Male' という規則項目が守られているが、'Non-adult' の項目が侵されている。しかしながら、その発話は、文脈抜きにしてはもちろんのこと、四十歳の男が発したとしても、奇異な表現でない。'rock' はもともと具体的な無生物であるが、'The lord is my rock.' と言える。この場合は、'rock' の分節領域を表わす 'Non-animate' という規則項目が守られていない。しかし、このように選択制限規則の項目が侵されることによって、分節領域が広げられてゆくことは極めて言語的なことであり、分節の意味が第一義的にもっている generality をそのようにしてどんどん広げて、無限のわれわれの心象を表わすのに役立つ。metaphor が生じるのは基本的には分節の境界があいまいであるためである。四十歳の男によって発された 'I'm still a boy.' の 'boy' は 'boylike' の意味であり、'The lord is my rock.' の 'rock' は 'rocklike' の意味である。これらの文で、-like なしで意味をなすということに分節の境界があいまいであることが示されているのである。-like を付された語はそれを付される前の語と共通の分節領域をもっている。分節の境界のあいまいさを利用し、そこにある領域の共通性をもって、metaphor ができ、用いられる語にたいしては新たな隠喩範囲を有する分節を構成する⁷⁾。この隠喩範囲が表現上固定すると、語のもつ新たな分節として辞書項目になり、一つの分節化によるものとして言語のなかに固定形式として入れられる。

metaphor に用いられる語は、それがもともともっている分節領域を変えるが、完全にではなく、部分的に変える。変わらない部分そのまま生かされて、もとの分節領域を越えて適用されるときに変更部分が生じて、それが様相的に消失し、適用される分節の様相部分と入れ替わる。もとの語と metaphor を担う語の分節領域に共通性のあることが metaphor を成立させる要因であるが、それが成立するのは本来相容れぬ分節領域をもつ語に特定の語が適用され

るからである。言わば、分節領域の葛藤が metaphor の成立に役立っている。四十歳の男が 'I'm still a boy.' と発したときには、'boy' の分節領域において 'Adult' と 'Non-adult' の様相範囲の葛藤があり、その二つに分節領域に共通性のあることを基礎としながら、その葛藤のなかに相容れぬ分節領域の結びつきが起こる。'The lord is my rock.' では、具体的な分節領域と抽象的なそれとの間に葛藤が生じ、'rock' の本来有す分節領域を共通にもちながら、具体的分節領域と抽象的分節領域の結合が成立する。'Concrete' と 'Abstract' の様相は、実在の観点からすれば、全く異なるものであるが、分節領域は心理的には握されているから、分節の観点からすれば、常に共通性をもちうる様相である。

このように、様相の対立、相違は心理的側面から考慮されるから、その間の連絡は容易である。また、対立の全領域、相違の全領域を問題にして metaphor が考えられるわけではないので、なお一層、様相間の連絡は容易である。いろいろな level の様相があって、それらは必ずしも平面的に在るものでなく、層をなし段階的になっており、また各層の expansion も違っているから、層的な連絡ばかりでなく、expansion の面での連絡も可能なわけである。metaphor はそのような層と expansion を変容する。それはそれらを壊すのではなく、それらに新たな形成素材を盛り込むのである。そのことは決して temporary なものでなく、持続的な性格をもっている。それは、新しい語を作る作業ではないが、新しい分節を作る作業であり、層という縦の関係、expansion という横の関係を利用して、新しい分節を作ることの意味する。層は抽象的な高さをもって、expansion は抽象的な面積をもって存し、心的機能の限界によって言語的にその高さや面積とに制約が加えられている。しかし、それらは言語事実においてはそれらの内部、外部を新たに形成しながら広がって行く。そして、高さや面積をもったそれらの枠は、大きさ、質において、変化し、心的機能の自由とそれによって分節化される言語の恣意性を示すのである。material reality は心的機能の限界によってその分節化における限界を示しはし、また一方、material reality がわれわれの知覚範囲のなかに含まれる限界ゆえに、前提的に、抽象的に、分節の総体としての層と expansion の構成物に限界を与えるが、その限界のなかで、metaphor という言語事象が自由と恣意性をもって、分節の数の変化と分節領域の質の変化を生じせしむるのである。

3

非物質的対象は言うまでもなく具体的に物質を有す個物として存在する対象に対する。それをここでは、(1) property (2) relation に分けて考えてみる。それらは、分節化において、具体物に基づいており、具体物の分節化が次元を異にして現れたものである。それは、具体物の分節化と同じく、知覚能力に端を発していることに変わりはなく、その能力が先ず直接的に具体物をは握して、別の種の分節化が行われたということである。

このように、非物質的対象は具体物との関係でとらえられるが、前者の分節化の対象の概念は a priori にあると考えることができる。属性、関係の概念はあらかじめ思考対象としてあると考えられるのである。それらは存在にたいして前提的、必然的概念でありその意味で、非物質的対象の分節化ではそれらの概念を具体的対象の様々な様相にたいしてあてはめ、適用したと言える。つまり、具体的対象のなかに a priori にある概念を探し当て、見つけ出す作業が、非物質的対象の分節化で行われたのである。物質的対象が客観的に存在しているように、非物質的対象が a priori になれば分節化ということばは用いられない。なぜなら、単に後者が前者を根拠としているというのであれば、そのことによって既に心的に分節として後者が把握されていることを意味するからである。物質的対象は個物として在るが、そのことがすでに分節化されているということでない。それに根拠を得て、それにたいし、人間が分節化をしなければならぬ。それと同様に非物質的対象はその先験的存在ゆえに分節化という作業が行われなければならないのである。

先ず属性を考えてみよう。‘a round thing’ ‘a fresh thing’ は「物」として存在するが、‘roundness’, ‘freshness’ はそうでなく、「物」の属性である。「物」は属性をもって存し、‘a round thing’ は ‘roundness’ という属性をもち、‘a fresh thing’ は ‘freshness’ という属性をもっている。‘roundness’ は形態の属性であり、‘freshness’ は質の属性である。このように、物質的対象は形態と質に二分される属性をもち、分節化はその二つにたいして行われる。形態は、‘roundness’, ‘squareness’, ‘triangularity’, ‘raggedness’ などの概念を含むが、「物」は一方に形態を必然的にもつから、それにたいする分節化は避けられない。感覚は存在性と同時に、形態に向かって不可避的にはたらく。つまり、感覚は「形態を具えた存在物」にははらくことを余儀なくされている。分節化する以前に感覚は単純概念として物質対象を知覚している。‘a round thing’ を知覚しているときは、その ‘roundness’ を判断概念としてもち、‘a fresh thing’ を知覚しているときは、その ‘freshness’ を判断概念としてもっている。「物」にたいする単なる対象的知覚の他に、「物」の存在判断とそれの属性判断をしていることになる。‘I perceive a thing that is round.’, ‘I perceive a thing that is fresh.’ とうかがえる知覚状態が生じていると言える。‘I perceive a thing.’ は知覚が「物」にたいして対象的知覚としてはたらいしていることを示し、‘a thing that is round’ は属性判断の態度を示すものである。しかし、属性判断は、存在判断と異なり、属性間の差異を前提としなければならず、形態という概念のなかに種々の対立的、関係的概念があることを前提としている。存在判断は、「物」が単に存在すること自体で言語的関りをもつが、属性判断は対立的、関係的概念によって言語的関りをもつ。ここにも、物質対象が非物質対象にたいして primary であることが示されている。

Quine は Abstract terms という項で次のように述べている。 "...we took the distinction between general and singular terms seriously; and such is the important distinction between

'round' and 'roundness'. The basic construction in which the distinction between general and singular figured was that of predication. Whereas 'round' and the like play the role of 'F' in 'Fa', 'roundness and the like are suited rather to the role of 'A' or 'B' in 'Fa', 'Fab', etc.⁹⁾ このことばは、'roundness' が「物」の属性を表わし、それが 'a round thing' の 'roundness' であることを示している。そのことは、また、属性それ自体が存在することはなく、ある「物」に付随しており、その付随性の様相を言語的に分節として設定したことを示唆する。個物の物質性に基づき、他の属性との関係において抽出された特定の属性分節は、ある「物」に存すると同時に他の「物」にも存する。material reality に付随してあるゆえに、属性分節がその数だけあるというのは「物」の精細な質の様相を考慮してのことであって、この種の分節は、material reality の分節がその適用において一般性をもってなされると同様に、同等の属性的分節領域をもつものに一般性をもって適用される。この属性分節は material reality の個物の数を乗り越えているから、material reality の分節よりも適用において一般性が濃いと言える。それは同じ分節を有する material reality にも、異なった分節を有するそれにも適用され、後者の場合では、属性分節は物質の数ばかりでなくその種別を乗り越えて抽象的に適用はなされる。

material reality の分節化が最大、最小の方向へと恣意的であると同様に、属性の分節化もその抽象性において同じ性格をもっている。'roundness' は野球用のボールにも、地球にも、視覚的あるいは想像的に円い天球にもあてはめることができる。このように具体物の数、種別を乗り越えるところに属性分節の抽象性の幅の大きさを認めることができる。抽象性の幅が大きくなりうるということは a priori に考えられる形態と質を対象としていることに起因する。形態と質の認識様式に人間の能力の枠があるなら、その分節の幅は大きくなりざるを得ない。しかも、属性分節の抽象性の幅は個物の数から独立していると共に、形態的確然性、質的確然性を乗り越えているから一層その幅は大きくなる。たとえば、形態を客観的に見れば 'raggedness' をもつ表面はまた同時に 'roundness' をもつ表面であると言えるからである。一方、個物において、'unfreshness' を有す点があるにしても 'freshness' におおい隠されることがある。material reality は物質的に確然としているから、同じ level の分節によって、それが A でもあり、B でもあることはなく、その存在にたいしては一つの特定の level にある特定の領域をもつ分節が適用される。

material reality は形態と質を具えて在ると同時に、それは特定の「色」をもっている。当然のことながら、あらゆる具体物が同じ色をもっているなら、それらの distinction が容易でなく、分節化が極めて難しい。個物が色を具えて在るということはその存在においては属性としての色をそれ自身とは切り離すことのできないものとしてわれわれの前にあることを意味する。色は質から生まれ視覚の観点からは形態に宿るものである。これは極めてその分節の適

用範囲が広い。人間の認識能力と目的性によってその適用範囲はことさら広くなる。

‘a round thing’, ‘a fresh thing’ と同様に ‘a red thing’ は物体として単一に存在するが、‘redness’ は ‘roundness’, ‘freshness’ と同じく個物として考えられているのではない。‘redness’ という属性は物質的に確かめられようが、それは個物としてあるのではなく、属性としてある。‘redness’ それ自体が単一に個物をはなれて在るということはない。言語的には ‘redness’ という属性が分節として選り出され、そのような言語形式を付与されたことになる。この名称は、‘roundness’ ‘freshness’ がそれを知覚する態度によって制約を受けたように、その分節領域の面で同様に知覚する態度の制約を受ける。知覚態度は、一定の時点、状況と共にあるから、それらによってまずあらかじめ制約されている。それらの条件によって客観的に特定の色の分節を内包する対象が別の分節と覚知されることが起こりうる。この場合は、ある一つの客観的对象にたいして分節領域の移行が行われたことになる。しかし、分節の設定は、すでに述べたように、material reality の客観性に基づいてのみ行われているのではなく、それと心的機能の相関において行われているものであるから、「物」の物質的客観性だけを問題にして分節化が考えられてよいものでなく、認識的な関りを一方に据えることが抜きにされてはならない。ある「物」が ‘redness’ を有すと認識されたならば、物質の客観的見方からの当否はともかくとして、それが ‘redness’ の属性をもつとし、その分節をそれに適用するのが当然である。

このことは、ある物が ‘redness’ という分節をもつようにも思われ、また別の分節ももつようにも思われるということではない。認識的観点において一つの分節をもつと判断されているのであるから、一つの物の表面に ‘roundness’ も ‘raggedness’ も認めるのとは違し、ある物に、‘unfreshness’ の分節は認めるものの、‘freshness’ の分節が大勢を占めるから、その物の属性を ‘freshness’ と定めるのとも違っている。そこでは客観的な属性差を心的に承認できているのである。しかし、それが認識態度を左右する状況移動が行われた場合にはどうなるであろうか。やはり分節の移動は起こりうる。‘raggedness’ は ‘smoothness’ へと移行しうるし、‘raggedness’ を表面にもった ‘a round thing’ は ‘smoothness’ をもったものとして判断されうる。しかしながら、この場合に、状況の実態に客観的限定を付すことによって、このような分節の移動を確実に保証できるわけではなく、それは認識能力をもつ各人の反応様式に依存するから、時と場合による可変的な事柄である。状況は具体的に存し、また各人の反応様式も抽象的に考えられているのではない。だから、それらを人為的操作によって変えることは問題にしないとしても、状況と反応様式の相関関係は理論的に考慮することができる。すでに在る A という属性に B という状況と C という反応様式が作用すれば、A という分節の認識が生じ、A という属性に D という状況と E という反応様式が作用すれば、属性 A の移動が起こって F という分節の認識が生ずるといことは理論的に考えられる。このように、属性は物質的観点でのみとらえられる不動のものでなく、状況と反応様式の作用を受ける動揺性をもつ。

属性にはさらに「大きさ」が属する。これも色と同様、質から生まれ形態に宿る。大きさには、「長さ」、「幅」、「面積」、「体積」などが含まれる。具体物はこれらの属性をもって存し、「This is small.」「That is large.」「This is long.」「That is short.」などと言われ、これらでは predicate adjective によって属性が表わされている。この「大きさ」の属性は比較認識によるもので、個物自体のなかにとらえられる form と quality のは握と異なる。たとえば、「smallness」という属性は、他の「largeness」をもつ物との比較によってとらえられ、その物より大きさの属性の dimension が劣ると認識される。「roundness」、「freshness」は物質的、客観的に、「A thing that has 'roundness' is round.」「A thing that has 'freshness' is fresh.」と言いうるが、「A thing that has 'largeness' is large.」と言うのと異なり、後者の「largeness」は同じ一つの物について「smallness」をもつと判断されうる。「a round thing」がその表面に同時に「raggedness」をもつと判断されるのは、他の物との比較によるのではなく、認識様式の相違から生じるものである。「a large thing」が同時に「smallness」をもつと判断されるのは比較認識が前提としてあるからで、同一物だけを属性判断の対象としているわけではないからである。

違う名称をもつ個物間にも大きさの比較はなされるが、同じ名称をもつ個物間にそれはなされ、両者においては比較上の認識態度に差はないと思われる。それは、形態に宿る大きさをただ知覚映像としてとらえるからであり、物の機能的相違、質的相違を問題にしていないからである。機能的な「smallness」、「largeness」、質的な「smallness」、「largeness」はなく、形態的なそれらがあるのみである。その「smallness」、「largeness」は客観的測定によってその物質的根拠を見出すことができるが、通常、「a small thing」、「a large thing」を認識するときは、単に知覚経験を基にしている。だから知覚の誤りが測定によって正されることはあろう。このことから、大きさの属性が言語形式となる方式は、視覚映像的判断によるもの、客観的な測定判断によるものがあることになる。視覚映像として現れた「largeness」という属性は測定判断によって「smallness」という属性に移行する可能性があり、それらの分節領域の移動が起こりうる。このことは、何にたいして「largeness」をもち、何にたいして「smallness」をつもつかという点で考えられており、個物それ自体について考えられているのではない。個物それ自体は、先に述べたように、「largeness」、「smallness」のどちらの属性も同時に含んでいるからである。大きさの分節化は二分法 (dichotomy) が用いられているから比較を前提としており、それゆえに、個物の大きさのなかに dimension の対立概念が入ることをあらかじめ許容している。

「大きさ」の概念で表わされる非物質対象は二分法が用いられる以前、全体的な分割されないものとして先験的であったが、具体物を対象とする段階で、大きく二分法が適用され、「より大きいもの」、「より小さいもの」が知覚され、それが分節化の作業のなかで分節として抽出されたのである。「より大きいもの」、「より小さいもの」は、幅、長さ、面積、体積との関係をもたざるを得なく、それらも「大きさ」の属性を構成するのである。そして、それらについ

では、「より広いもの」、「より狭いもの」、「より長いもの」、「より短いもの」等が知覚の対象として具体物のかたちで存し、それらの属性的構成要素がさらに分節として抽出されるのである。

これまで、形態、質、色、大きさが具体的対象について考えられ、これらの属性は物質の付随性としては握された。つまり、形態をもつ物の「形態」、質をもつ物の「質」、色をもつ物の「色」、大きさをもつ物の「大きさ」として考えられてきた。このように物質の側面から見られねばならないこれらの属性は感覚により受容されることにより、言語形式的に別のものへの転用が実現する。‘His voice is soft.’, ‘Jack is narrow.’ がその例で、前者では、たとえば、‘The ball is soft.’, の ‘soft’ と同じように物質を対象としていなく、後者では、‘The board is narrow.’ に見られる ‘narrow’ とは異なり、やはり物質を対象としていない。このように、それぞれ ‘soft’ の分節、‘narrow’ の分節が、異なった性質をもつものに対して適用されることによって、属性そのものを同一言語形式内で変化させる事実が生ずる。ball の ‘softness’ と ‘voice’ のそれ、また、‘board’ の ‘narrowness’ と Jack のそれとでは、属性そのものの違いが見られる。しかし、これらは全く別の分節領域をもつ属性ではない。ちょうど、具体的に存在する ‘a pig’ を基にする ‘He is a pig.’ という比喩表現にみられる分節領域における共通性を有している。ball における ‘softness’ と ‘voice’ における ‘softness’ に属性的に分離する全く別の分節領域があるということではない。

このことは物質の側面にとらえられる分節領域の問題ではないので、明確に視覚的にその共通性を設定することは困難であり、結局は、心的には握される概念的共通性に頼らざるを得ない。つまり、意味の共通性と言語形式とのより直接的なかかわりでその依存関係を考える。ball の ‘softness’ と voice の ‘softness’ における意味の連らなりに属性の分節の移行の手がかりを得て、その連らなりがその二つの語の分節領域を結びつけるつなぎの部分によって成立していることを考えるのである。そのつなぎは全く無関係な領域をもつ分節を結びつけるのではなく、分節範囲が部分的に共通しているために、心的にも共通部分のある分節を結びつけるものである。

4

次に非物質対象としてある relation の分節化を考えてみよう。relation は、それ自体、概念として抽象的に意味あるものと考えられることができるが、それは必ず、あるものと他のもの、あるいは三者以上のものの存在——それらが具体的であれ、抽象的であれ——を前提としていることは言うまでもない。この場合、relation は、対立物の関係、類似物の関係を含めて、あらゆるものの時間、空間的な関係を指す。この関係は人間の知覚、言語以前の問題として考えることができる。つまり、「物」が在れば関係の概念は自らあり、物質問のみならず、物質と

非物質、また、非物質間にも様々な関係概念があらかじめあるということである。関係は位置の関係ということばに大きく置き換えることができ、それは、具体的なものであれ、抽象的なものであれ、ちょうど、先述した属性が物質そのものでなかったと同様に、nonmaterialである。このことは関係が具体的な視覚対象にならないということでは必ずしもない。この意味で、関係も属性と同じく、物質的根拠をもちうるのである。

これまでの章で述べてきたことは、ある具体的対象、ある抽象的对象そのもののなかに分節化の素材を探り当ててきた。しかし、関係の分節化はそれら自体を分節化の材料するのではない。この分節化の特徴は言語形式の連鎖のなかにも表れてくる。すなわち、具体的、抽象的对象としての個々の物と共に、またあるまとまりのある観念形式と共に、関係分節は表れるという特徴を示す。たとえば、それがそのように表れなくとも言語形式の連鎖のなかに implicit にその特徴をもっている。このように、関係分節の言語形式は他の形式にとって必要なもので、それゆえにそれは意味を有しているとは言え、機能性が強く、同等の機能を果たすことができれば、ある語の内部に不可分離のものとして表れることもありうるわけである。

先ず、関係の分節化を具体物との関連で考えてみる。関係分節はこの具体物のどの位置を取り上げるかによってそれが定まるが、本来的には、先述したように分節化は恣意的であるけれども、その定め方はある具体物が他の具体物にたいしてもつ関係を表現する必要性の程度に依存し、実際には、たとえば、前置詞として表れた分節は数に限りがある。material reality にたいする具体名詞の付与、またそれに基づく抽象名詞の付与にはすでに言及し、そこでは個物それぞれに即して分節化が行われる事実を一つに見ることができたが、その際には個物の数によって分節の数が制約を受けた。しかし、関係分節は個物の数にかかわらず、個物と個物の関係に制約を受け、関係概念の必要性が実際に小さければ、抽出される関係分節は少なくなる。だが、抽出される分節の数が少ないことはその適用範囲の面では逆に大きいことを意味する。

実際の適用例を見て見よう。‘on the table’, ‘on the desk’ の ‘on’ はそれに後続する物の形態と質とかかわりなく、‘above and supported by’ の意味をもって、それら個物の表面に接する特定の物との関係で適用されている。関係分節の適用範囲の広さは、このように一定の形態と質を具えた個物の数を乗り越えることにあるばかりでなく、同一物内でのその適用の様式にもある。たとえば、‘on the table’ において、table の上面の表面積と形は一定であるものの、その表面のどの部分に他の個物が在っても ‘on’ は用いられうる。このことは位置関係を表わすあらゆる前置詞についてあてはまる。具体物との関連で考えられる前置詞の分節はその物のなかに物質的根拠をもっているのであるが、形式連鎖におけるその機能性ゆえに関係を表わす分節として言語的にあらわれたのである。たとえば、‘on’ は ‘the top surface of something’, ‘under’ は ‘the bottom surface of something’, ‘behind’ は ‘the back surface of som-

ething' というそれぞれの物質的根拠をもっている。しかし、すべての前置詞は物質根拠を本来的にもちながらも、それにどのような言語形式が後続するかによって、その分節の性質を変えてゆく。'behind' は 'behind the hill' において 'at or on the far side of' の意味をもち、少なくとも 'in front of' ではないが、明確に 'the hill' の 'back' を表わしていない。'He has vile treachery lurked behind his smooth manners.' では、'behind' は、物の back が視覚に明りょうでないという意味に支えられて、'concealed by' の意味をもっている。'behind one's usual time' では、'behind' は物の back が front よりも位置的に後であるという意味に支えられて、'later than' の意味を表わしている。'His friends are behind him.' では、'behind' が 'in support of', 'supporting' の意味を表わし得る。

しかしながら、このような分節の概念範囲の変容、拡張を物質的根拠にもとめるということは反省の意識によるものであって、分節の概念は意識によっては握された結果物であるからその概念範囲の変容、拡張は実に微妙な意識範囲の変容、拡張の問題としてとらえられなければならないだろう。

すべての前置詞は関係の分節化の結果であるが、それらなくして形式連鎖上関係概念が表わされなというものでなく、それがその分節の機能性の強さに起因することは既述した通りであるが、そのことは、また、関係分節はいわゆる referent をもっているかどうかの問題を提起する。W.P. Alston は次のように述べている。"Consider prepositions like 'into', 'at', and 'by'. There is no doubt that each has a meaning, in most cases, a number of meanings. For example, one of the meanings of 'at' is *in the direction of*; however, 'at' can hardly be said to refer, denote, or connote. We can see that referring is out, by the same argument as that given previously; we cannot use 'at' to pick out what we are going to talk about in a given sentence."¹⁰⁾ また、S. Chase は、"...the goal of semantics might be stated as 'Find the referent'."¹¹⁾ と述べたが、関係分節は具体物そのもの、抽象物そのものでないので、referent はもたない。関係分節は、referent を心的にでなく、明確な知覚物と考える見方に従えば、referent 間の関係を指すものである。この点で、この種の分節は常に基底的には referent とのつながりをもって言語形式の連鎖を形作る。言語表現は referent をもつ形式が主たる役を担っており、時には、機能性の強い語は表面にあらわれないことや、同等の機能を果すことのできる関係語が用いられたりする。それで、われわれは、例えば、'He arrived at the house.', 'He got to the house.', 'He reached the house.' のいずれの表現を用いても同じ意味を伝えることができるという事例をもつ。前置詞が機能性の強い語であるということは、第一と第二の文の同義性よりも、それらと第三の文との同義性に顕著に窺える。というのは、同じ referent をもった語を、たとえば、'earth', 'globe' のように異なった語で表わしうるからである。

言語形式の連鎖は語の意味と機能により成り立つが、その反映としてある種の語が機能性

の強いものとしてあるという事実が見られ、前置詞が、後に述べる接続詞と共に、それに属する関係の概念を表わすというはたらきのなかにすでに前置詞の機能的役割が示されているが、それは常に文字通り機能性のためにあるのではないことはもちろんである。‘The book lies on the desk.’ という文を考えてみれば、そこにある ‘on’ は関係を表わす機能的役割を果たしているばかりでなく、位置関係の概念を表わし、つまり、本の存在する位置は、‘on the desk’ であって、‘under the desk’ や ‘beside the desk’ でないことを表わしている。‘lie’ の意味は、横たわる物の位置を考えさせるので、この場合は、それを明らかにするために机との関係で、‘on’ を用いて本の存在する位置を表現している。この例では、‘on’ という前置詞が、関係分節として、非物質対象を表わし、それを、具体名詞が具体物を表わしているときにその名詞が意味をもっていると言われるときと同じ資格で、‘on’ のなかに意味させている。この点で、この ‘on’ が機能的にのみはたらいているのではないと言える。

他方、先に挙げた、‘He arrived at the house.’, ‘He got to the house.’ が ‘He reached the house.’ とも言えて、第三の文で、最初の文の ‘at’ がなく、第二の文の ‘to’ がなくて済ませるのは、日本語の ‘で’、‘に’、‘を’、‘は’ の様に、それらの前置詞が真に機能性の強い語として用いられていることを示す。それらが ‘reached’ と共に用いられていないのは、‘reach’ の動詞としての性格が destination との関りではその次に関係分節を表わす語を要しないからである。このことは、語と語の文法的な関係から指摘しており、‘reach’ の概念は、‘lie’ の概念が特定の「物」の存在する位置を思い起こさせると同じように、特定のものがどこに着くかを思い起こさせることができる。その場合に、‘reach’ は他動詞として関係分節を表わす語を次に取らず、明りょうに referent をもつ語を直接取るということが示されているだけである。

関係分節はその機能性に着目しなければならないので、前置詞として認められる語は時にその発生的観点で度外視される。発生的には現在分詞に由来する ‘during’, ‘notwithstanding’ を前置詞に含めることができるし、機能的共通性の点で、二語以上から成るいわゆる group preposition も関係分節を表わすとされる。われわれは語を先に立てて分節化を考慮するのではなく、material reality と nonmaterial reality を分節化の際の意識では握されるべき思考対象としてもち、その後語を考慮しているから、分節として設定されたものが一語となってあらわれるか、二語以上の群となってあらわれるかのいかんはあらかじめ決定されていない。その意味で、語群の ‘in front of’, ‘in spite of’ が関係分節を表わすものとしてあり、Curme に従って、‘in the matter of’, ‘in the name of’, ‘in the presence of’ などを group preposition¹²⁾ と見ることができるのである。

機能的観点から前置詞と最も密接な関係にあるのは接続詞で、それは、Jespersen に従って、sentence preposition と呼ぶことができる¹³⁾。‘during his absence’, ‘while he is absent’ では後続する部分に句と節の相違はあるものの、両者が同義であることからして、前置詞と接続

詞の機能の緊密性と、接続詞が関係分節を表わすものであることの根拠が窺い知れる。

関係分節は具体物をもとにするものと、抽象物をもとにするものに分かれているが、機能性の強い語、語群は後者に入れてよい。言語発生前の段階を考慮するならば、理論的に関係分節の群を認め、そのなかに、時、場所、条件、譲歩等を表わす分節が含まれていると考えることができる。これらが文法的にどのような名称を与えられるかは別として、言語表現の意味を構成する上での機能性に重点を置いた場合、それを同様に有すものとして、前置詞が用いられたり、接続詞が用いられたりする。また、ある接続詞の関係分節の領域は他の接続詞のそれと重複し、意味構成の面で同じ機能を果たすることがありうる。一方、接続詞の機能がいわゆる分詞のなかに包含され、分詞構文のかたちをとって、後者のなかに前者の分節領域が共通に見られることにもなる。分詞の機能の一つが関係分節の機能群に含まれているわけである。

先にふれた具体物にもとづく関係分節と抽象物にもとづくそれとは、その機能群のなかに互に異なる性質をもって含まれているが、関係を表わす一つの語が常に一つの固定した機能を具えているのではなく、その語の全分節領域の内部で、具体物にもとづく性質をその範囲内で異なる分節領域に移行させるばかりでなく、その性質を抽象物にもとづく性質へと移行させ、領域全体の構成に与っている。

注

- 1) *Aspects of Language* (Harcourt Brace Javanovich, 1975), p. 187.
- 2) *The Principles of Semantics* (Oxford Basil Blackwell) p. 70, Cf. S. Ullmann, *Semantics, An introduction to the science of Meaning* (Oxford Basil Blackwell) p. 57,
- 3) Cf. D. Bolinger, *Aspects of Language*, p. 236,
- 4) *Language* (Harcourt Brace and Company, 1921) p. 13.
- 5) Cf. F. Boas, *Language, General Anthropology*, ed Boas, pp. 124-45,
- 6) *Op. cit.*, p. 190.
- 7) アリストテレスが最初に術語として“Metaphor, ということばを用いたと言われているが、彼は次のように述べている。“Metaphor consists in giving the thing a name that belongs to something else...” (*Poetics*, 1457 b), このことばには、筆者の述べる metaphor における分節領域の重複の事実が示唆されている。
- 8) W. Quine が, abstract object' ということばを用いて、次のように指摘している。“...I deplore that facile line of thought according to which we may freely use abstract terms, in all the ways terms are used, without thereby acknowledging the existence of any abstract objects.” (*Word & Object*, The M.I.T. Press, 1967, P. 119.) また, R. Carnap は次のように述べている。“Recently the problem of abstract entities has arisen again in connection with semantics, the theory of meaning and truth. Some semanticists say that certain expressions designate certain entities, and among these designated entities they include not only concrete material things but also abstract entities...” (*Meaning and Necessity*, The University of Chicago Press, 1967, pp. 205-6.).
- 9) *Op. cit.*, p. 119.
- 10) *Philosophy of Language* (Prentice-Hall) p. 17.
- 11) *The Tyranny of Words* (Harcourt Brace & World, Inc.) p. 9.
- 12) *Syntax* (D.C. Heath and Company) p. 562 f.
- 13) *Op. cit.*, p. 87 f.

Summary

The purpose of this paper was to clarify the position of the segmentation of reality in a linguistic system.

What is to be segmented exists outside language. It can be classified into two great divisions: material reality and nonmaterial reality. The segments of the former take the forms of concrete nouns and those of the latter take the form of abstract nouns and the other parts of speech of which only two, preposition and conjunction, were inquired into.

Segments, which human cognitive function finds in and between the realities, are of abstract nature and are given linguistic forms that the speech organs produce. Each segment has its own sphere and the whole meaning of a linguistic form, in most cases, consists of more than one segmental sphere, while often several words together constitute a segmental sphere. The word which expresses over one meaning has the segmental spheres overlapped within it. Each of the spheres is unfixed and shifts its position in the use of metaphor and in the change of one meaning of a word into another.

The segmentation of nonmaterial realities includes that of the forms and qualities of material realities and that of many kinds of positional relation between them. Thus it depends upon the latter realities.

The form and the quality are not material objects themselves but what belong to them. Therefore they are segmented as the properties of such objects. The segments of positional relation are used as those of temporal relation and also as those of other abstract relations which can help to make a sentence in a purely functional way.